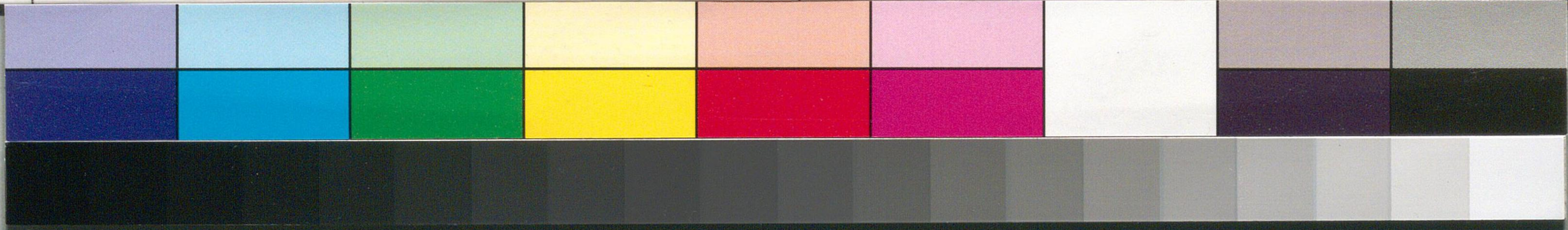
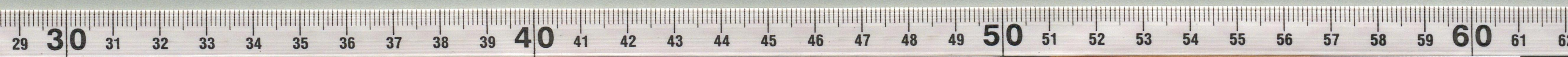
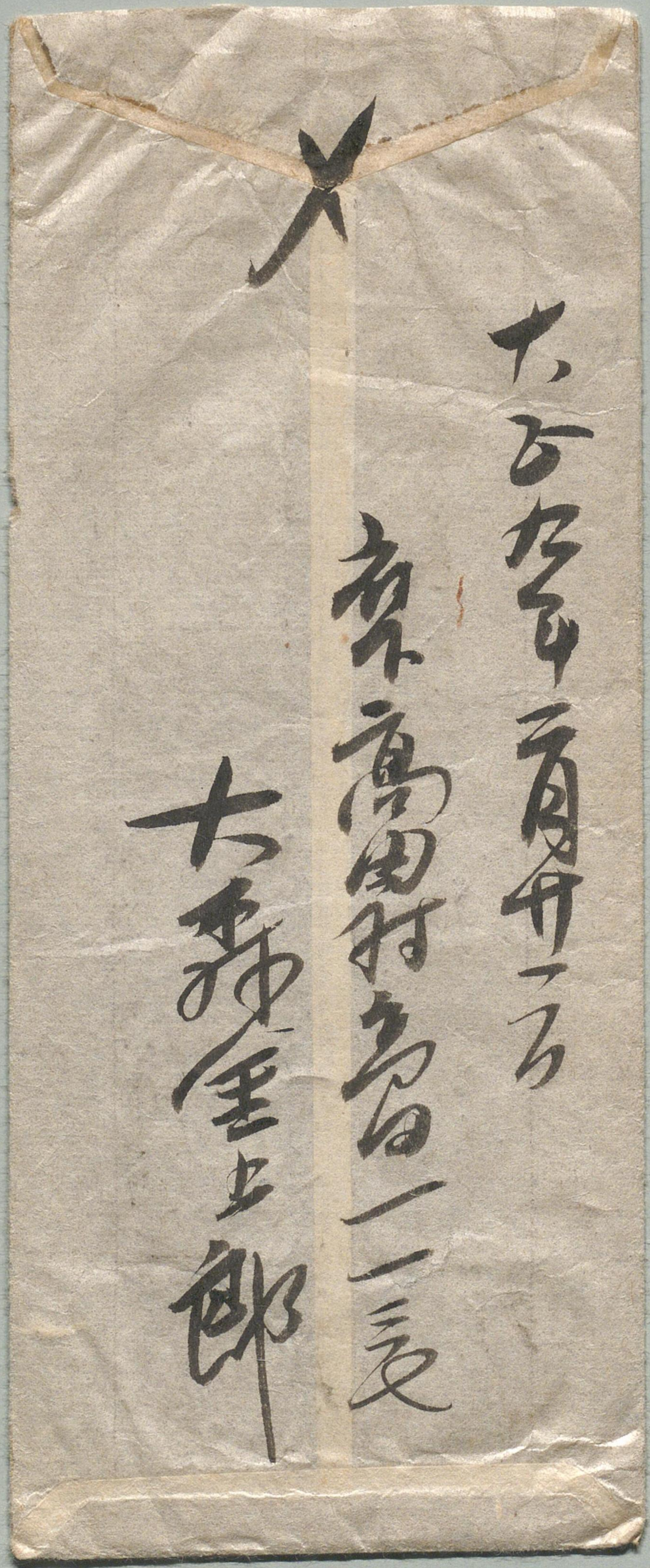


力多所止大城産屋所也
子家計水冲生上殿

呈披

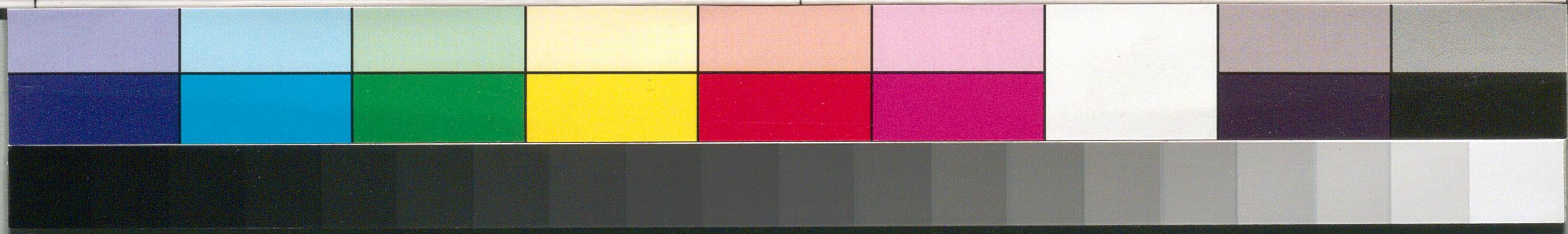
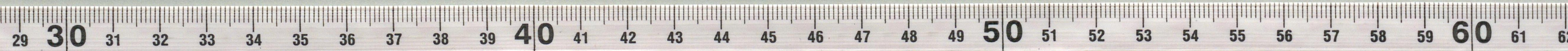




大正九年正月廿二日

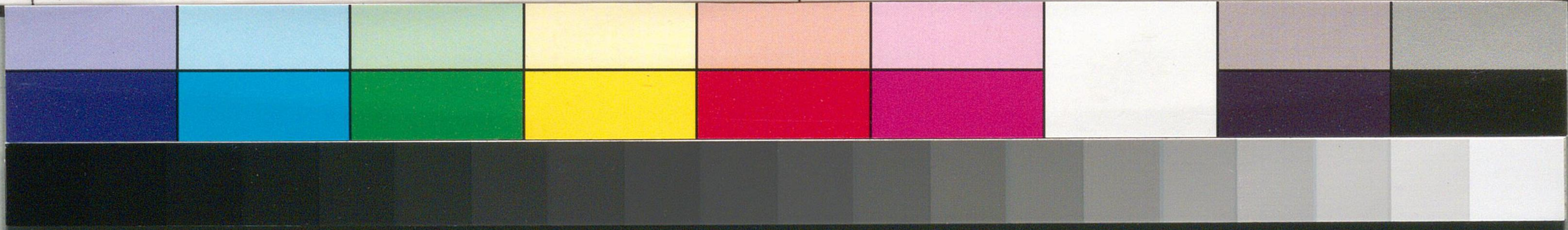
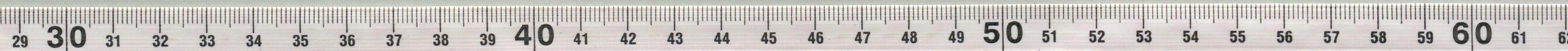
高田村重

大森金太郎



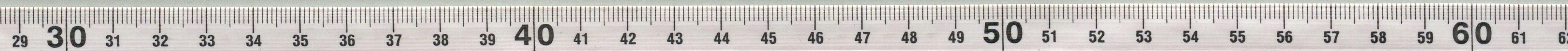
No.

十年分は新艇の費用に出る所の費用は
 の二船本別号と異なりて以て其々未考の事
 其船名にてありて其の後に記せる法
 多し電報等も他に費用せしむる事
 在りて其の費用を以てしむる事
 唯計はA B Cの組合を以てしむる事
 客船等の敷地を以てしむる事
 其一向に船名の道と稱せしむる事
 其と異なりて其の費用を以てしむる事
 其の勝りたる事と称せしむる事
 一、其船名の費用は其の費用と



No.

乙借（さる）は此理仰用掛は辭表を提出
 したりと、其理由なるの存れを、陸奥と具
 合致し（さ）めんと。
 一、某傳音官の支那事ありたり申と極し
 秘蔵在りしが、如き謬りあり（照）し
 ぶらとありす。
 陸奥は宮内大臣の面々一、次長を置かれんこと
 を乞ふに、大臣は曰く、今は此長所のこと
 は、これあり、實は陸奥問題として心算し居れ
 りと、此陸奥は曰く、吾君陸奥行旅の事か何とい
 子との都合は、秋なりなりしが、大臣は曰く、



No.

税後所得自分の為に印紙せらるゝ方なら
申渡すこと申渡すこと、まゝ申渡す
提出しなると。後者の管金を引取らるは
去書に取用するにあらずやと。
以上諸項風方にとまると、まゝの
に教授等の監査ありしと存する事
に申上

昭和九年二月二十日

古森金吾印

水野子爵殿
御手紙